

1

A ウ
B イ
C ア
D 工

1 太陽
2 (記述題)
3 水
4 水
5 イ

6 多様化
7 I イ
II ウ

8 工

9 X 工
Y ア
Z ウ

10 a 曲
b 左
c 太古

1 a 口
b 生徒
c 血相

2 X イ
Y 工
Z ア
3 I 自
II 自
3 II 来

4 7
5 イ
6 命令
7 緑の香り

8 (記述題)
9 夏
10 B

1

2
メタンガスが空気中から激減し
て気温が下がった。
地球の海が氷
でおおわれた。

2

8
絵を描くことを仕事にしたいという思
いと、母から感じた千穂への愛情。
(同意可)

配点	
1 9・10 2 1・2	各2点×12=24点
1 2 2 8	各6点×2=12点
その他	各4点×16=64点
100点	

1

1 文や段落の並べかえでは、文中の指示語や接続語がヒントになる。ここでは、イの「そのおかげ」やエの「そんなころ」といった指示語が何をさしているか、アの「しかし」がどのような内容をつないでいるのかを考えればよい。すると、ウ「現在の地球において」「空気のうち21%程度である」「酸素」のおかげでイの「様々な生き物が呼吸をして生きていられる」という部分と、アの「30億年前の地球では」「酸素はほとんど…空気に含まれていなかった」ようなところに「人間が生まれていたとしても…住んでいられなかったらう」の部分の二つにまとめられる。そこからアの「しかし」に注目すれば、ウ↓イ↓ア↓エに答えが決まる。

2 酸素濃度の劇的な上昇の結果は、③の次の行にある「大量の酸素がそれを一変させてしまった。」という一文の後に書かれていた。

3 ②の直後の「数パーセント程度明るさが低下する」では「太陽」の意味合いもないし、字数も合わない。そこで同じ内容の部分を「太陽」や「低下」などのことをヒントに探していくと、6行後の「太陽のパワーが今より弱かった」が見つかる。または、太陽の明るさが低下すると気温が下がることから、地球の気温の低下について書かれた場所に答えがそうだと思当をつけられる。

4 温室効果ガスにより地球が温かかったため、豊富な水が凍らないままで地球上に存在していたのである。「水の惑星」というたとえは、地球を表すときによく使われるのであわせて覚えておこう。

5 ④の段落の終わりに、「生き物の多様化に酸素濃度がどのくらい…影響を及ぼしたのかは、まだ分かっていない」とあるので、「多細胞動物の多様化」と時期が近いものは、「酸素濃度」に関わるものである。ウの「温室効果ガスが減少したこと」は24億年前の酸素の大発生でも起きていることであるので、直前の「24億年前の出来事より」と合わない。

6 ④を含む一文から「多細胞動物の多様化」が話題になっている。また、⑤の直後の文で「酸素濃度が上昇する現象は、多様化競争を生み出す最初のトリガー」となったとまとめられていることから「多様化」が入ると考えられる。

7 I：アの「絶体絶命」では環境に合ったものが繁栄するという意味合いがない。ウの「自業自得」は生物の行いによって環境が変わるわけではないので誤りである。エの「適材適所」では環境に合わないものが数を減らすという意味合いがない。II：「日陰者」は「公然と世に出られない立場や身分」のことである。ここでは「死滅したり」と並べられているので、アの「目立たない」よりも、ウの「個体数の少ない」の方が意味が近い。

8 アは中略部分の3行前に「その後再び劇的に酸素濃度が落ち込み」とあるのでまちがいがいい。イは④の直前の段落に「温室効果ガスの減少については」「様々な要因が考えられている」とあるが、その中に酸素が分解するとは書かれていないので誤り。ウは文章中に「46億年にわたる地球の環境というのは決して安定的ではなかった」とは書かれているが、「地球環境が安定的になった」とは本文中には書かれていないのでおかし。エは⑤の次の行に書かれているとおりである。

9 外来語に自信がない場合は、いきなり外来語辞典のようなものを丸暗記しようとせず、身近なことばから調べていくとよい。

10 aは四字熟語の一部なので難しかっただろう。「紆余」も「曲折」と同じく「曲がりくねること」という意味である。b「右」の一画目はたてのハライ、「左」の一画目は横棒である。c「太古」は「大昔」という意味である。「太」を「大」としてはいけない。

2

1 a「口」を同音の漢字と取りちがえてはいけない。b「徒」を「従」としてはいけない。c「相」は「顔つき」という意味である。

2 Xは本心を話すのが恥ずかしくてつぶやくように話している。Yは担任の教師が生徒たちにしっかりと自分の思いを伝えようとしているところである。Zは葉っぱが風に吹かれてそよいでいる様子である。

3 IIは直後に真奈を偉いと思う理由の形で書かれている。さらにその後「あたしなんかより、ずっと…」とあることから、Iは母親に逆らえずもやもやしている千穂と対照的な内容になるであろうと見当がつけられる。

4 ②・④は「実現するはずがないただのあこがれ」の意味で使われている。

5 直前に「登るのは簡単だった」とあることからアとウは合わない。エの「語りかけるような」は、後の場面で風にそよぐ葉の音から千穂が感じとった大樹の声の様子であり、ここには合わない。

6 木からのささやきに答える形で母親への不満が書かれているところがヒントになる。

7 くり返し出てくることばであるが、文章末にある「千穂はもう一度…吸い込んでみた。」という一文が⑥に対応している。

8 「思い出させてくれて」とあるので、過去の体験や思いが答えとなる。直前の母親とのやり取りだけでなく、③の直後の「そうだ、そうだ」からの内容も木に登って思い出したことであるので答えに含めていこう。

9 【Z】の二つ前の段落に「あれは、今と同じ夏の初めだった」とある。大樹が「緑の葉を茂らせて」いることもヒントになる。

10 一つ目は真奈の母親と話す中で千穂の進路へのもやもやした思いが語られる場面であり、二つ目は久しぶりに木に登ったことで絵を描きたい気持ちや母の愛情を思い出し、母と向き合って自分の夢をかなえようと決意する場面である。